

所属学部/研究科・学年(留学時): 農学部 4年

留学先大学・参加コース: Yale University, Topics in International Economics

コース期間: 2012年 7月 2日 ~ 2012年 8月 10日

卒業・修了後の就職希望先: 1.研究職 2.専門職(医師・法曹・会計士等) 3.公務員 4.非営利団体 5.民間企業
6.起業 7.その他()

1. 留学先大学の概要

Yale 大学の Topics in International Economics というコースを選択しました。

皆寮に入り、朝昼晩の食事つきですべてキャンパス内もしくは徒歩圏内で賄える形になっております。

2. 留学の動機

大学最後の年の夏休みということもあり、自身の専門に関連した事項を英語でより深く学んでみたい、という点と卒業後英語を要する職業に就くため英語で国際経済について理解し議論できるレベルまで達したい、という二点から短い期間ながらも留学を決意しました。

3. 留学の準備

①プログラムへの参加手続き(申請にあたってのアドバイスなど)

これなら自分でもできそう、というプログラムよりも、少し背伸びしてみたほうが苦労も大きいですが、得られるものも大きいのではないかと思います。

②ビザの手続き(ビザの種類、申請先、手続きに要した時間、ビザ申請にあたってのアドバイスなど)

ビザを申請する際に郵送の有無について問われる項目があり、少なくとも周囲の話を聞く限り皆間違えて“はい”を押し申請が滞っていました。申請プロセスに関しては米国外務省のウェブページに書かれてはいるのですが、不明瞭な部分も若干あるので間違いやすいポイントなどは事前に伺えたらよかったと思います。

③保険関係の準備(加入した海外旅行傷害保険・留学保険等)

ごく最低限の保険に加入しました。

④留学にあたって東京大学の所属学部・研究科で行った手続きなど(履修・単位・試験・論文提出等に関して)

教務課及び指導教員、学部委員の教授の方々に単位認定が可能かどうか問い合わせました。

夏学期の試験は日程的に受けられなかったのですが、単位はほぼ取り終えているので試験は今学期は受験していません。

また、奨学金の関係で指導教員の教授に推薦状を書いていただきました。

⑤語学関係の準備(出発前の英語レベル・語学学習等)

以前海外に住んでおり、少なくとも日常会話に関しては大きな問題はなかったため特に何もしていません。

⑥日本から持参した方がよいもの、その他出発前にやっておくべきこと・アドバイスなど

たいていのは現地で調達できるので、これは持参しないといけないというものはありません。ですが、洗髪、洗顔料などは自分の髪質、肌質に合わない場合もあるので気になる方は持参することをお勧めします。

4. 留学生活について

①住居(住居の種類(寮・ホームステイ・ルームシェア等)、家賃、宿舎の様子、見つけた方法など)

寮でスイートがあてがわれ、5人で住んでいました。

②生活環境(気候、大学周辺の様子、交通機関、食事、お金の管理方法(海外送金・クレジットカード)など)

比較的乾燥しており、日中は暑かったですが湿度が低かったため快適でした。大学周辺は治安があまり良くないとのことで特に夜道は二人以上で行動するように強く念を押されました。交通機関はバスなどがありますが、駅まではタクシーで5分程度、それ以外は徒歩圏内でした。食事は基本的に寮のダイニングホールでの食事中心で、お金は現金を多少持っていきましたが基本はクレジットカードを使用していました。

③危機管理関係(留学先の治安、医療機関の事情、心身の健康管理で気をつけた点など)

特に気を付けたことはありませんが、海外にいることを自覚して行動していました。

④留学に要した費用とその内訳(航空賃、授業料、教科書代、家賃、食費、交通費、娯楽費などの概算)

約8万円(交通費、教科書代、食費、娯楽費)

授業料、家賃は奨学金が出ていました。

⑤奨学金(受給していた場合は、支給機関・支給額など)

Banco Santander Scholarship 3,438米ドル

FOTI (Friends of Todai, Inc.) 3,000米ドル

JASSO (日本学生支援機構) 16万円

⑥学習・研究以外の活動(スポーツ・文化活動、ボランティア・インターン、週末や長期休暇の過ごし方など)

同じプログラム参加者とともに週末は小旅行に赴いたりスポーツをしたり、精力的に活動していました。

5. 学習・研究について

①履修した授業科目のリスト(そのうち、帰国後東京大学で単位認定の申請を行ったものに●をつけてください。)

●Topics in International Economics(単位認定申請中)

②留学中の学習・研究の概要(授業・予習・復習のスタイル、印象に残っている授業等)

授業:15人のクラスで四角いテーブルを囲みディスカッションを行いながら論文を読み進めていく形式

事前課題として授業で扱う論文を読んできたうえで(毎回4~5本)、復習も兼ねてDiscussion Paperとして読んだ論文について批評を行う課題が課されました(計2回)

③学習・研究面でのアドバイス

しっかりと背景知識を固めておいた方がいいと強く思いました。(時代背景など)

④語学面での苦勞・アドバイス等

学術的な議論に参加するのはより高度な語彙を必要とすることもあり、苦勞しました。

また、自分の意見を素早くまとめて発言する、ということは日本語においても訓練が不足していた部分であり、日常的に意識してくればよかったと強く思いました。

6. 留学先大学の環境について

①留学生へのサポート体制(語学面・学習面・生活面・精神面でのサポート等)

短期間であったこともあり、特に何かサポート体制が確立していたわけではないですが、各寮の棟にはカウンセラーとしてイェール大学の学生が1, 2名おり、何かあったらサポートしてくれるようにはなっていました。

②大学の設備(図書館・スポーツ施設・食堂・PC環境等)

全て出入り可能で何でもそろっていました。また、キャンパス周辺全体的に wi-fi が飛んでおり非常に便利でした。

8. その他

①準備段階や留学中に役に立ったウェブサイト・出版物

特にはないです

②今後留学を考えている学生へのメッセージ・アドバイス

不安などもあるかもしれませんが、是非一歩を踏み出してみることをお勧めします。もし可能であれば自分よりも前に同じプログラムを利用した方にお会いしお話を伺ってみるとより明確に自分がやりたいこととマッチさせることができいかもしれません。

④その他東京大学のホームページ等に掲載可能な留学中の写真があれば添付してください。

2012 IARU Global Summer Program 学習成果に関するレポート

大学生最後の年の夏休みであるため、何か今までしなかったようなことがしたい、と思い今回このサマープログラムに応募しました。学生のレベルが担保されていて、かつただの語学留学ではなく明確に何を学ぶかがわかるようなものに参加したいと考えていたため、名門であるイェール大学の寮に実際住み、キャンパスで勉強することはまたとない機会であり、このような機会を今回与えてくださったことに非常に満足しております。

私が選択したコースは”Topics in International Economics”というものでした。私自身の大学での専攻は農業資源経済学であるため、直接国際経済、金融に関係のある専門ではないですが、

1. 英語で経済に関連した事項をさらに深く学び、議論できるレベルまで達する
 2. 金融業界に進むため、国際貿易及び昨今の金融危機への理解を深める
- という2点を目標とし臨みました。

今回 IARU の GSP でイェール大学に派遣された日本人学生は全部で5人おり、こちらのプログラムでは日本人は1人でした。周りの学生は英語が母国語もしくはほぼ母国語に近い中、自分で完全に満足のいく結果が残せたとはい切れませんが授業では積極的に発言をするよう心がけたり、講義内容

を聞き逃すことのないようにボイスレコーダーで授業を録音したりすることで後れをとらないようにしました。実際英語力が伸びたか、というとその点においての変化は特にはなかったのではと思いますが、アカデミックな英語に触れたこと、今までにないほどの論文を短期間でしっかりと読み込み、また常に自分の意見を発することが求められる環境に身を置けたことは自身の勉強面での向上につながりました。

具体的なプログラム内容としては、授業は火曜、木曜の週二回 3 時間ずつで 6 週間のうち最後の 1 週間は最終課題(term paper)に取り組むための時間として今年度から設けられたとのことでした。当初授業が週二回と聞いて楽観的にとらえておりましたが、毎回の授業に論文を 3, 4 本、多い時は 5, 6 本しっかりと読み込んでいかなければならず、また宿題(problem set)や扱った論文に対する批評(discussion paper)、さらには授業時間内にクイズがあり、さすがに一筋縄ではいかないという印象を受けました。テーマとしては自由貿易にはじまり通貨危機、昨今の金融危機まで幅広く扱い、この授業内で読んだものをベースとしてさらに発展した論文を読んでいく、という形であったため全体像が見えやすくそれでいてしっかりと取り組まないとあつという間に取り残されるようなものでした。授業は論文の内容を理解しているか、さらには上にも書きましたがその論文に対し自分はどのような意見を持っているか、どのような情報がプラスされていればさらにその論文がよいものとなるか、何が不足しているか、を常に考えさせるようなスタイルで進行していきました。人数は 15 人と少人数のクラスで四角いテーブルを全員で囲んでの授業でしたので、日本でいうとゼミのような形式で、進行役は基本的には教授ですが毎回一本は生徒が自主的に名乗り上げプレゼンターとして進行していきました。これまで英語でレポートを書いた経験がそこまで多くなく、書いた時も体系的な小論文を書いたに過ぎなかったため、今回このように自分の考えを盛り込みつつレポートを作成する課題が課されたことは私にとってチャレンジでした。最初の discussion paper を書いた際はということが求められているのか、どういう書き方をすればよいのかを明確に理解しきれずに書き苦労しましたが、その後教授からの丁寧なフィードバックもあり次の提出の際にはだいぶ楽に書くことができ、term paper も表やグラフなしで 12 ページ、という多めの分量でしたがどうにか書ききることができました。

次に生活面についてですが、まず到着すると寮の一室がアサインされます。私の場合、スイートの中の一室があたり、スイス人、中国人、デンマーク人と住むことになりました。個別の部屋が充てられたのですが中には二人一室のところもありました。非常ドアを挟んで隣は男子学生たちのスイートでそちらには 5 名(日本人、シンガポール人、中国人、スイス人、オーストラリア人)がいたのですが、非常ドアのアラームが解除されていたため行き来でき皆が集まりやすい環境となっており、よく勉強の合間にコモンスペースに集まり、談笑したりカードで遊んだりし交流を深めていました。

週末や少し課題量が少なめの週には皆で小旅行にいたり、また大学側のカウンセラーたち(イェールの学生が夏の間カウンセラーとしてサマースクールに来ている生徒たちを統括してくれました)が企画してくれたイベントなどに参加したりして勉強の息抜きとしていました。GSP 参加者でロングアイランドの方までドライブビーチで泳いだりして楽しんだものの、寮に帰った後は課題に追われて必死になっていたのは良い思い出です。課題量は多かったものの皆要領よくこなし、週末は論文をバッグに忍ばせながら様々なところに旅行に行っていた印象が強いです。私はボストンに行きましたが、ワシントン DC やナイアガラまで行った参加者もいました。また、プログラムの一環として国連に訪れる機会もあり、その後は Yale Club にて食事をさせていただくなど、このプログラムに参加したからこそできる体験は非常に貴重でした。6 週間が終わるころには皆非常に仲が良くなっており、年末にはヨーロッパ

のどこかで集まり共に新年を迎えよう、と誓って別れるほどでした。

国際理解に対する意識の変化ですが、以前父の赴任で海外に滞在しており、それ以降もサマーキャンプや地元の交流事業団で海外に行き現地の同世代と共に過ごしたり、海外学生との交流団体に所属したりとたびたび海外へ視点を向けることが多かったため、このプログラムに参加したから劇的に国際理解への意欲が変わった、または考え方が変わった、ということはありません。しかし、これまでの経験があったからこそ今回このようにさまざまな国の生徒が集まり同じ授業を受ける、という中で互いの考えを尊重し合えたり、普段の寮生活の中でもうまく関係を築き上げたりすることができたと思っております。

また、学習に対する意識に関しては日本の大学生はお世辞にも皆が勉強熱心とは言えない中、参加していたどの国の学生も非常に勉強熱心でいて、それでいて遊ぶときは遊ぶ、などとオンとオフの切り替えがしっかりとしている印象を受けました。日本の大学教育が決して悪いとはいませんが、勉強するのが当たり前、という環境を作っていない限り今後さらに競争が増す世界において日本はより後れを取っていきかねないと危惧しました。英語が世界で最も使われている言葉であるにもかかわらず自分のまわりを見てもアカデミック、そしてビジネスレベルで英語を使いこなせることを目標とし、さらには実現できているケースは非常に稀です。さらには日本語ですら自分の意見を主張する、考えをまとめて発表するという訓練を積んでいる学生は少ないため、そのような点も強化していかなければいけないと切実に感じました。実際、私自身授業外の場面においても同プログラム参加者に、「日本では何か問題が起きた時にトップが辞任することで責任をとる、というのが文化なのか。なぜ短期間にこれだけ首相が変わるのか。それに対し日本人はどのように考えているのか」と問われ、すべてを満足に説明しきれずもどかしさを覚えました。これに関しては普段からどのような視線で物事をとらえているか、という自身の問題ではあり、今後意識していかなければならないことと痛感しました。

最後に次の海外留学への関心ですが、既に卒業後の進路は決まってはいるものの、今後大学院に行く機会があるならば是非海外の大学院に行こうと考えています。学部の中の留学も考えましたが、専門性もない中で留学しても語学留学の要素が強いものになってしまうのではないかと、思い留学という選択肢は考えていなかったのを今では少し後悔しつつも、今回このようなプログラムに参加できたことで物事を前向きにとらえいざ行ける機会があったらそのチャンスを掴めるようにしよう、と思っております。